石川県石川郡河内村内尾にみられたニホンザル伝承と白山山麓地域における住民の自然認識と民間伝承比較論の成立

広　瀬　　鎮　財団法人　日本モンキーセンター

ON THE CHARACTERISTICS OF JAPANESE MONKEY-LORE SUCCESSION AT KAWACHI-MURA, UTSUO AND SOME NATURE RECOGNITIONS WITH LORES IN THE REGION OF THE FOOT OF MT. HAKUSAN

Shizumu HIROSE, *Japan Monkey Centre*

I　はじめに：問題の提起

白山山麓におけるヒトと自然・生物とのかかわりあいをめぐる人文科学研究に着手して以来，特に同地帯におけるニホンザルをめぐる民間伝承の残留形態について調査を試みてきた。[註1] すでに，筆者は石川郡白峰・中宮・尾添・瀬波・吉野地域を対象としてニホンザルに関する伝承についての聞き込み，アンケート調査を実施してきたのであるが，今回，昭和50年9月29日，石川郡河内村，内尾(うつお)を調査地として，地元情報提供者を囲んで，ニホンザルに関する伝承についての聞き込みを行なった。ニホンザルに限る伝承を収録するということであっても，当然，クマ・イノシシ・その他の野生生物がかかわる生息状報に触れることも多く，イノシシの捕殺情報を得ることも出来た。さらに伝承成立の背景となる地域住民の野生生物に対する知識度や，自然環境への認識調査の必要性はますます高まってきたものと考えている。

内尾地域におけるニホンザル伝承に関しては，特に，住民生業に関するもの，ニホンザル拒否の感情や，ニホンザル捕獲に関する伝承，ニホンザル民間口承のいくつかに接したのであるが，同地区における居住民と野生生物との接触に関しては，他地区住民間の自然観や，動物観とその成立の背景および人々の自然物対応の差，自然観，動物観形成上の問題が検討されねばならないと考えられるので，今回の調査内容を基に，尾口村地域における住民の自然認識の実態と関連して考察を加え報告する。

今回の調査には，白山自然保護センター松山利夫技師，吉野谷村下吉野の山本重孝氏，尾口村小中校の真野哲三氏の協力を得た。厚く御礼申上げたい。なお本調査研究は，昭和50年度白山調査研究委員会委託研究費によるものである。

註1：白山資源調査事業　1972年度報告（石川県白山調査研究委員会）

II　調査方法

1974年度の瀬波地区の調査に引きつづき，下吉野在住の山本重孝氏を通じて，直海谷川に沿った内尾村を対象として地元インフォーマント（情報提供者）の人選を依頼した。その結果狩猟体験者数人から伝承聴取の機会を得ることができた。元河内村教育委員　内藤長松氏（62才），白座　定氏（74才），松井　一氏（62才），坂田辰雄氏（55才）の4名から特にニホンザルおよびイノシシ猟を中心とした狩猟実態について聞き込みを行った。イノシシは昭和34年2月の捕殺である。（従来，イノシシは関係者間でその生存をめぐって論議が交わされてきた事項だけに，詳細な調査が更に望まれるので

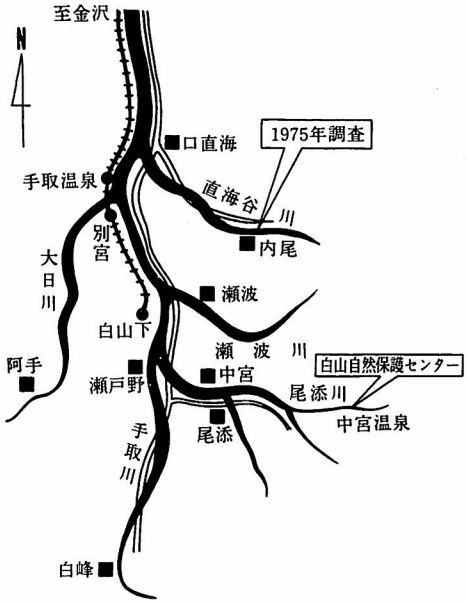

図1　ニホンザル民間伝承調査域

ある。）内尾はかねてより，瀬波・中宮・尾添と並らんでクマ撃ちで著名な所であり，直海谷川に沿って9km入った山間の地であり，かつては住居も50戸ほどあったが，今日では20戸となってしまった。現在学校通学児をもつのは2軒だけである。内尾は，白山信仰とのかかわりもつよく，修験道および古代山岳信仰と自然神信仰の影響が随所に見受けられる。木を切ると神の祟りで水が出てくるといわれてきた神様山などの地名も伝えられている。聞き込みは，内藤長松氏宅において行なった。

III　内尾地区のニホンザル民間伝承について

今回の聴込みはニホンザルに関して特に，動物観・自然観・信仰生活・衣食住・生業・狩猟・産業，交通，儀礼・民謡等各分野に関する伝承の収録を中心とし，野生ニホンザルの分布，住民のサルへの好嫌度，食・薬用伝承についても調査を行なったのであるが，興味ふかいことに，ニホンザルを狩猟対象動物として追い，捕獲したことに関する伝承や，ニホンザルの出没，天候にかかわる伝承等が収録されたが，当地区へのニホンザル群の接近は，すでに数10年前にとだえはじめていたのである。その後，同地域の住民のニホンザルの野生の群れに接する体験は減少した。ひとりザルに出会うといった話題も10年前後のものとなっている。今回話題提供をねがった4名は，ニホンザル民間伝承について小学校教育でうけた，修身やその他，博物学等の教化の強い影響を受けていることが理解できた。現在同地区では野生ニホンザルの生息情報がもたらされていない。

今回の聞込みは，録音に収録した。以下に発言順にニホンザル伝承を中心として列挙する。

（N氏　内藤　M氏　松井　SA氏　坂田　SZ氏　白座）

N氏

○イノシシは，昭和34年2月に下折（そそり）の吹上げで2頭，木馬部落で2頭合計4頭を撃った。

S氏

○この地域には，100年ほど以前には，イノシシが生息していたと伝えられている。イノシシは馬越の「千畳這い」に現われた。

○80才の老婆から聞いたが，奥尾谷に3群，昔はサルがいた。サルの群れにはボスがいる。そして雪の中でもラッセルして移動していた。冬も元気に移動した。

○二代前にはサルとりは1月からシシトリと一緒の時期サルを巻いて槍でとっていたと聞いている。

サルが居なくなったのは，明治37，8年（1904—1905）の日露戦争の時，鉄砲を撃つことを覚えた村のものが，サルを追うようになってからだ。

○大正7年（1918）の豪雪で下折都落の7戸がつぶれ19人が死亡したが，この表層なだれで，サルの大きな群れがやられた。

M氏

○サルのナギ畑荒らしはアズキ・ソバを一晩のうちにごっそりとやる。

○畠荒らしにはタイコを叩いて追いはらった。
○女たちは，サルが出てくると木を切ったものを一かかえもっていって，これを一本一本なげて，「ひゆうっ」という音をさせてサルを追った。この音は丁度タカの羽音のようにサルには聞こえるらしくサルがこわがって逃げる。[註2]
○サルのことをヤエンボと云う。
○サルが縁起が悪いということは耳にしたことがない。
○サルは畠を荒らす悪い奴ということを今迄聞いてきた。
○このあたりでは，サルを食べるということはない。
○子供の頃には，千羽もトリ（ツグミ）がとれたらお祝いをしたものである。
○三猿（耳ざる聞かざる言わざる）は仏教からきたものだと思う。昔からちょいちょい云われているのを聞いた。
○サルにおそわれたら，白いサクリをかぶって鳴きまねをするとサルが逃げて行く。また白い布をかぶって葬死のまねをして泣くとサルが近よらない。
○千代屋（家号）が若い頃，早朝にひとりで杉山へ入ったところ，サルの大きいのがきて，「いじめ」の態度に出たことがあった。
○サルを追う時は，イタドリの茎を取って笛にして，「ブーッ」という声を出す。するとサルは逃げて行く。
○サルビヨリというのは，大体朝のうちの天気で，くもっていて，雲の切れ目に太陽がパアーッと光るように白くさしてくる時を云う。しかしすぐこれも曇ってしまう。今天気だと思っていても安心できない，あまりおもしろくない天気のことを云う。
○天気に関しては，「朝の明神川越するな」「朝の明星百日照る」などの諺がある。
○荒木又エ門はサルに剣術を習ったという。
○ヒヒ・ショウジョウなどにはこわい話があった。ヒヒは良くない動物であり，酒を飲むとショウジョウみたいだと云った。

N氏

○頭の毛をのばした子供のことをヤエンボのようだといった。
○子を思うサルの愛情のたとえ話しとして「断腸の母猿」の説話を聞いたことがある。
○サルは薬りになることは聞いている。
○内尾ではサルは，人間にとりつくされて絶えたのではない。サルは文明きらい，いなくなったと思う。サルは自分からすみかを変えて行き，すめなくなったら行ってしまう。

SZ氏

○孫悟空は，三蔵の知恵袋である。
○かつて山手5ヶ村長がすべてサル年であって珍らしいことだと噂した。
○サル知恵というのは悪いことを意味する。
○昭和50年，県道をあるいていて大きなサルをみかけた。
○サルをやっつける方法に，サルマネを利用する。鎌で自分の手を切るまねをする。
○修身の先生は，「ダダコ」達の説教にしばしばサルをもち出した。
○草とりについて弁当をサルにとられた話を聞いたことがある。

SA氏

○昔は，犀川上流，黒谷上流まで，クマ打ちに入ったが，他地方の者とも協力しあって一緒に猟をして，わけあったが，だんだんこういう事もなくなってしまった。今ではすっかり排他的になってきた。

M氏
○ウマヤザルの信仰については知らない。
○庚申，山王さんのことは聞いたことがある。
○内尾地区ではサルを可愛いというものはないだろう。「畠荒しの悪いもの」という気持がつよい。
○サルは感が強く，石をもって近づくだけで音もたてずに見えなくなってしまう。移動も音をたてない。
○大正5年（1916）14才の時サルの群れを見た。犀川谷，コチラ谷に，父の炭焼きについていった時であり，枝の又の所に大きいサルが居てこわかった。100頭程はいたが，これ程沢山のサルはその後みたことがない。

以上，4人からのニホンザルに関する聞き込みをあげたが，内尾地区のこれら情報提供者に関する限り，ニホンザルに関する民間伝承は，白山麓の他の地区に比して，内容が豊かである印象を受けたのである。

註2：白山山麓にはウサギの捕獲にシブタと呼ばれる藁製の用具がある。投げるとタカの羽音に似た音がするためウサギが木の根などにもぐり込むが，そこをつかまえる。
白山山麓地域 民俗資料緊急調査報告 1972（石川県立郷土資料館）

Ⅳ　ニホンザル伝承の地域別特色―（内尾と尾添・中宮地域の比較）―

ニホンザルに関する現在に伝えられた口承に関して，
①サルへの感情，②サルに対するヒトの対応，特に野生ニホンザルを避けるための方法，③サルの捕食，④サルにまつわる天気予兆の4項目について，直海谷川沿いの内尾と，尾添川沿いの尾添・中宮の両地区を対比して考察を試みてみよう。なお，両地区の自然環境および，住民の居住生活の歴史的背景等については本論ではふれない。ニホンザル伝承面にあらわれた両地区の伝承存在の違いのみを指摘するにとどめる。
①　直海谷を口直海よりさかのぼり，板尾，下折，内尾へいたる。内尾では，先に述べたごとく，サルが少なくなったのは，明治37・8年（1904―1905）頃からであると伝えられている。
また大正5年（1916）2月には100頭ほどの群れがみられ，大正7年（1918）折下のナダレでサルの群れがやられたとも伝えられている。現在ではニホンザルの姿はほとんどみかけない。このような状況にあるなかで，今回の情報提供者たちは，「大きなサルはこわい」，「畠あらしをする悪い動物」である，「ヒヒもよくない動物」と，感じてきた。サルを「可愛い」と思う気持は特別にもっていないようである。確かにサルに対しては好感を抱いていない。しかしながら，文物にあらわれたサルについては別であり，関心も深く，サルへの知識はかなり豊富である。なかでも，「サルは女をからかう」というように伝えられてきた口承がしばしば現われて土地に密着してきた地域特有の動物観が，定着しているように考えられるのである。
これに対して，尾添川に沿った中宮と尾添の両部落においては，ニホンザルは，狩猟を行なった者たちの間で「こわい」と感じられている反面，その他の人々はサルを「可愛い」と感じているものが存在している。また特にサルが「縁起が悪い」という気持が強いとは思えないが，サルに関心をもたない者，関心の深いもの等，サルをこわい動物と感じない者が，かなり存在している。この地区では極端なサルとの対決の気持に乏しく，出作りあとに，サルたちのために，食物を残してやったという口承まで伝えられていたのである。
②　次に，野生ニホンザルに対する人々の対応であるが，当然畠荒らしをする動物として好まれなかっ

た内尾においては，サル追い，サル退治について，興味あるサルとの対応伝承が伝えられていたのであり，前述のごとくイタドリの茎の笛をならすとか，枝木を切ったものをなげてサルを追う，あるいは，白いサックリを着て泣き真似をするといった，サル撃退の方法が伝えられていたし，草とりに行って弁当をとられた，サルは石を持っていると近づいてこない等，野生ニホンザルとの接近過程がいきいきと伝えられている点は，特色的である。これに対して，中宮・尾添部落においては，サル追いに関して，尾添において，異形をしたり，ブリキ罐をたたいて音をたてたりして，出作り小屋に近づくサルたちを追いはらっていた。また，この地区でも葬式の真似をするとサルは，近よらなかったと伝えられている。この奇妙な伝承は，白山山麓の他の地域でも古老の間に伝わってきているが，その意味するところはよくわからない。

③　サルの捕食に関してであるが，これは，両地区全く対象的である。内尾は昔からクマ打ちで有名であったが，サルの肉については肉を食べるということは，ほとんど話題にならないのである。情報提供者たちは，サルの話題に強い関心をもち，昔からの説話などもよく知っており，サルが薬となることも知っている。しかもサル撃ちの話も伝わっておりながら，サルの肉を食べたという話は全く聞けなかった。ところが，瀬波川に沿った瀬波にも，尾添川に沿った中宮・尾添のうち尾添でもサルの肉については，「初雪のふる頃の肉はうまい」，「秋ザルは嫁にくわすな」という伝承までが残されていたのである。いまだ，充分な資料を得ていないのであるが，これに対して中宮においては，多少の禁忌観がみられる。すなわち同地区はサル捕殺の経験談を聞くことがあっても，「サルはあまり銭にならない」とされ，明治初年岐阜側の猟師たちによって狩猟が入りこんできたり，昭和初期には富山県の猟師が入ってきたといった経過が伝えられているにもかかわらずサルをたべた話が乏しいようである。一体これは何に起因するのであろうか。狩猟の形態，分配・配分，その他宗教的な禁忌や，鳥獣捕獲をめぐる禁令などと人々の関連によるものと考えられるが，この点はまだ充分明らかでない。このように，サルの肉食に関しては，地域による動物観，狩猟観，信仰とが関連しあって地域的な特色があらわれてくるとなると，さらに，住民の生活と環境の相互関係について詳細な調査を試みたいと考えるものである。

④　さらに，両地域にみられたサルにかかわる天候予兆についての伝承をとりあげてみよう。すでにIIIにおいてのべたが，内尾においては，「サルビヨリ」と呼ばれる天候についての表現があげられているが，自然現象のある情況について云いあらわされた例として特色あるものである。さらに，河内村には，「サルウジが湧くと，雪がなかなか降らない」という口承が伝えられている。これは，体に毛のはえたうじ虫だと云われているが，これがどのような虫であるかは明らかでない。これに対して，尾添・中宮では，「ブナオ山より下へサルがやってくると雪がふる」，「サルがやってくると雨」，「サルが出てくると雪」，など，雪と雨とサルの移動行動に関するものが，古くから伝わっていた。尾添では，サルの群れの移動の様子をみて，その年の雪のふかいことを予告している。サル以外のカエルとか，ミミズなどに結びついて雨に関する伝承等も伝えられているが，サルに関するこの種口承には，雨や雪以外に嵐や，強風，地震などにかかわるものが，日本各地に伝えられてきているのにくらべると口承例が多いとは云えない。

以上，ニホンザル民間伝承にあらわれた地域にみられたその違いを，4項目に限ってとりあげた。これ以外にニホンザルをめぐる，民謡・生息状況・生態等知識，民間信仰，文芸モチーフに関したニホンザル伝承の残留形態から地域による比較を試み，白山山麓地域における住民の自然認と民間伝承の比較論をさらに組織的な地域の調査と資料収集と共にすすめ，綜合的に白山山麓地帯の人々と動物と自然にかかわった過去から現在に至る自然観・動物観を明らかにしたいと考える。

V　尾口村にみられた住民の自然観，自然認識の特色

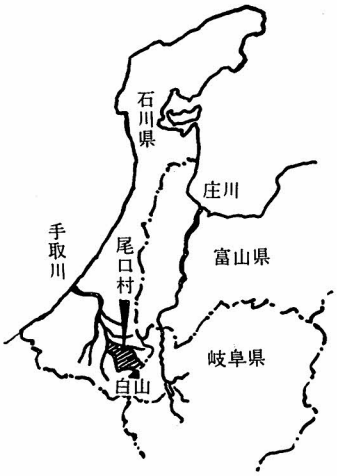

図2　石川郡尾口村の位置

ニホンザルの伝承の特色を把握すると共に地域住民の自然対応についての調査を石川郡下尾口村において試みた。これは，アンケート方式による調査であるが，尾口村小中学校，真野哲三氏の協力を得て『私たちの周辺，「昔と今」』というテーマで石川県石川郡尾口村27世帯の成人を対象としたもので，昭和49年10月～11月に別記のごとき質問表を用いて記入調査を試みたものである。そのねらいは，

①生活実態について尾口村集落の家庭を対象として，住環境の変化についての理解・認識，いつどのように，何が変ったかを調査する。②自然とのかかわりのある衣食住・信仰・生業についての住民の自然関心についての調査，③自己の週辺の自然のなかの生物・動物・植物・昆虫・岩石その他自然現象についての知識がどの程度伝えられているのか，④現状の環境への希望，未来に対しての希望を明らかにする。⑤野生動物との接触度についてその体験の有無，個々の体験の質的な差異について調査する。以上5項目を，質問63件によって書込み記入を願ったもので，今回は回答件数は少ないが，今後更に大規模に実施を試みる予定である。

自然に関する諺・云い伝えや，天候に関するものに関しても調査を試みたのであるが大方のものは昔からの諺を知っていて自然とのかかわりの深いことが推測できるのである。本件アンケート調査では，生息をめぐっての質問以外特にサルに関したものは調査対象におかなかった。

尾口村住民のアンケートを通じて，明らかになった点は，自然観・自然知識に関しては，今回の調査は住民の一部の限られた解答ではあるが，東荒谷，尾添，瀬戸，女原，瀬戸野，東二口，五味島地区の27家庭27名の成人，その内訳は，男8名，女19名であり，職業別にみると農業5名，教員，公務員2名，会社員4名，土木業6名，その他10名で，その年令も，20代1名，30代6名，40代9名，50代4名，60代4名，70代3名におよんでいるので，巾ひろい世代相の人々の自然や動物，環境への感じ方が明らかになったものと考えられる。自然生物への感情のあらわれ方の例として，「ヘビやカエルについてどのように感じているか」について，調査した結果，「こわい」59%，「こわくない」15%，「どちらでもない」15%，そこで「こわい」59%は興味ある住民の感情で，伝統的に根強い嫌悪感に近いものがみうけられたのである。

「山にすむ動物について住んでいると思う動物」をあげて，もらったのであるが，その名前も21例があがっていながら，サル2例，ウサギ21例，クマ76例，カモシカ，キツネ，ヤマドリ，リス各3例につぐタヌキ，シカ，イノシシ，イタチ，それぞれの2例と同様の認識水準にあり，アンケート対象の尾口村住民における認識のなかでは，サルはウサギ，クマよりもずっと下位に位置していたのである。ニホンザルの自然環境への適応という事からいえば，明らかに，サルたちの生活域は，次第に後退していたのである。このことを，尾添川の畔に野生ニホンザルが住んでいたことを知っていたかについて尋ねた質問に対する回答からみると「サルが住んでいた」ことを知っていたものは14名であり，「知らなかった」12名で，若年層は，サルを知らないのである。「知らなかった」と回答している住民たちの居住地区は，瀬戸野，瀬波，女原，東二口，五味島であった。しかもすでに1974年同地区で調査した野生ニホンザルとの出合いに抱く感情をめぐる聞き込み調査にくらべると，同地区の成

人層から明らかにされた資料では，野生ニホンザルに山で出合った時に「かわいい」と感じるもの20名，「こわい」3名，「何とも感じない」9名であり，サルの野生にぶつかった体験の消滅と共にサルへの愛着が増加しており，「サルが好き」18名，「嫌い」2名という回答結果を得ているのでこれにより，今日での尾口村住民にとってのサルへの感情は好いと推定せざるをえないのである。このことは，野生生物の生息情報や自然環境の認識と関連があると思われるが，アンケート回答者の年令的にみても，野生動物植物名の記載に乏しい年令は，40才～45才であり，自然環境の変化，学校教育の背景などと結びついて住民の自然観や伝承の実態が考察されねばならないのである。このように尾口村存在の成人各層の人々が自然に対する認識や，自然観に多くの価値感や認識の違いを存していることは，重要な点である。ニホンザルの伝承についても，野生生物に対する価値観にも大きな差異がもたらされている。

自然環境の変化にともなって人々の食物に対する考えはどうであろうか。成人層のなかに自然へのあこがれの例として，自然食として食べたいものに「ゼンマイ」，「ウド」，「フキ」，「ワラビ」，等14種があげられ，ヒエゴハン，ヒシコイワシ，イナキビゴハンなどが記載されていた。ここに彼等の根強い食物への趣好性が存在していることを示していると考えられる。

自然に恵まれ，過疎に悩む小さな村の小学校の生徒たちを対象に，「将来住みたいところ，わたしの将来すむところ」について絵入り作文をかかせた真野哲三氏によれば子供たちは，すべて家を大きく中心にして，男子は自動化，ビル，SF的なもの，女子は，広い庭のある郊外高級住宅のようなものを画いた。家のまわりに日光・空気・緑・水・その他快適な自然環境を求めているが，驚ろくべきことに野鳥昆虫その他の野生動物はほとんど記されていなかったのである。

同氏の指摘によれば，現在なお自然相手の遊びに事欠かぬはずの庭にかわる「自然」そのものに囲まれた山の子供たちにしてから，彼等の自然環境と関連性のない画一化された対象に目がむいているのである。[註3] 同氏の指摘によってもあきらかであるが，今後同地区における自然観の形成に大きな影響をあたえずにはおられない次の世代の実態が，浮きぼりにされてきているのである。伝承もまたより新たな構造の変化をせまられているのである。以下にアンケート様式をあげる。

アンケート項目

アンケート調査：私たちの周辺の「昔と今」

（質問には○印またはお気軽に書込んで下さい）

記入者

氏名　　年令

男　女　　職業

1　あなたはハタ織機を見たことがありますか。　ある。ない。
2　あなたはハタ織機で布を織ったことがありますか。　ある。ない。
3　養蚕の経験がありますか。　ある。ない。
4　かいこをかったことのある方はいつ頃まで飼いましたか。　現在もかっている。　5年　10年　15年前
5　昔から特に便利だと思ってきたきた衣類がありますか。　ある。ない。
6　それは何というものですか。
7　衣類の防虫にどんな薬品を使いましたか。
8　虫干しを現在もおこなっていますか。　おこなっている。　おこなっていない。
9　虫干しは効果があると思いますか。　思う。思わない。わからない。
10　クワの実がグミの実を食べたことがありますか。　ある。ない。

11　食べたことのある人はおいしいと思いますか。　おいしい。まずい。どちらでもない。
12　現在野菜や果物を栽培していますか。　している。していない。
13　栽培しているのは何のためですか。　自家食用　営業　その他
14　どんなものを栽培していますか。　あげてみて下さい。
15　今はやめているが昔は栽培していた方はいつ頃まで栽培をしていましたか。　5年　10年　15年前　戦前まで
16　栽培していた頃どんな虫がついて困りましたか，名前をかいて下さい。
17　防虫剤を使いましたか。使用した場合は薬品名，使用物をあげて下さい。　使用した　薬品名　使用しなかった
18　自然食品で今，何一番たべたいと思いますか。
19　あなたの家には庭がありますか。
20　あなたの家には，タタミの部屋がありますか。　ある。ない。
21　あなたはカヤを使用したことがありますか。　ある。ない。
22　カとか虫があなたの家のまわりでみられますか。　みられる。みられない。
23　カの退治方法についてかいて下さい。
24　ヘビやカエルをこわいと思いますか。こわい。こわくない。どちらでもない。好き。嫌い。
25　あなたの家の近所に大きな道が最近できましたか。　できた。できない。
26　その道ができて何か変ったことがありますか。
27　あなたの家の附近で特に車が多くなったと思うのはいつ頃からですか。　1年　3年　5年　7年　10年前
28　大八車や人力車をみたことがありますか。　ある。ない。
29　あなたの村では水神様や作神様をおまつりしますか。　する。しない。しらない。
30　最近あなたの村のお祭りは昔とくらべて変ってきましたか。　変ってきた。変らない。しらない。
31　かわったと思う点はどんなところでしょうか，書いて下さい。
32　あなたは神社やお寺へ家族でおまいりしますか。　する。しない。
33　お祭りで一番たのしかったことをあげて下さい。
34　あなたは，森や神社の附近へ行くと特別な感じがしますか。　感じる。感じない。わからない。
35　あなたは迷信について何かしっていますか，書いて下さい。
36　あなたは井戸水をツルベやポンプで汲んだことがありますか。　ある。ない。
37　水の味は昔と今とちがうと思いますか。　ちがう。ちがわない。わからない。
38　飲料水に市水道以外の水をのみますか。　のむ。のまない。
39　手取川や附近の川は以前よりきたなくなったと思いますか。　思う。思わない。わからない。
40　きたなくなったと思う人はなぜだと思いますか。
41　川や池で魚をとったことがありますか。　ある。ない。
42　どんな方法で魚をとったか，かいて下さい。
43　あなたは雨がふるとどんな事を一番に思いますか。
44　水や雨のことで昔からの云いつたえを何か御存知ですか。（例）カエルがなくと雨がふる
45　あなたは村の空気がきたなくなったと思いますか。思う。思わない。わからない。
46　きたなくなったと思う人はいつ頃からだと思いますか。5年　10年　15年前
47　あなたのまわりは人家が密集していますか。　している。していない。
48　あなたの家の周辺には緑がありますか。　ある。ない。
49　空気がきれいになるために一番大切なのはどれでしょうか。　水　植物　土　生物（動物，虫，魚）
50　あなたは家のまわりの東西南北の方向（方位）を知っていますか。　しっている。しらない。
51　東西南北の方向にある山，川，森，畠，池の名前をあげて下さい。　山　川　森　畠　池
52　その山にすんでいると思う動物をあげてみて下さい。
53　その森にはえていると思う植物をあげて下さい。
54　その畠にすんでいる動物（ケモノ，虫）をあげて下さい。
55　その川，池にすんでいると思う魚をあげて下さい。

56　あなたのまわりにみられる生物（トリや虫）の名前をあげて下さい。
57　あなたはまわりの自然で一番不足しているものは何だと思いますか。
58　今一番あなたの家のまわりに欲しいものは何ですか。
59　あなたは自然はいきものだと思いますか。　思う。思わない。わからない。
60　あなたは，お天気についてのことわざやいいつたえを知っていますか。　しっている。しらない。
61　今地震がおこったらどうしますか。
62　雪はこわいと思いますか。こわい。こわくない。どちらとも思わない。
63　尾添川の畔に野生ニホンザルが住んでいたことを知っていましたか。

以下に自然にかかわる住民の認識・意識・そして自然知識をめぐり若干考察をしてみよう。

環境への関心についての質問は，No.8, 9, 16, 17, 21, 24, 37, 39, 40, 43, 44, 46 であり，それ等に対する回答をとりあげてみると以下の通りである。

8：虫干しを行なっている。63%　虫干しを行なっていない。30%

9：虫干しの効果ある。78%，効果ない。0%。わからない 11%

虫干しの効果を期待し，大分の家庭で今日も虫干しを行なっているのであるが，「効果あり」と考えていても虫干しを行なわない家が 30%あるので興味ふかい。

16：作害をおこした虫　回答　男 2 名，女 11 名

その名前 12 例：アオムシ 6，キリウジ 2，コンカムシ 1，ジンジロ 2，コガネムシ 6，ビク 1，アリコ 1，テントウムシ 1，マイマイムシ 1，タニシ 1，ケムシ 1，ネムシ 1

17：防虫剤の使用 56%　不使用　4%

21：蚊帳の使用　48%　不使用 52%

24：蛇・蛙への感情　こわい 59%　こわくない 15%　どちらでもない 15%

37：水の味の変化　かわった 41%　わからない 37%　わからない 22%

39：川の水の変化　　きたなくなった 96%　かわらない 4%　わからない 0%

43：降雨時に思うこと　洪水，水量 22%

44：水・雨に係る民話　報告 12 例中，雨の伝承 7 例

46：村の空気汚染時　　5 年前 15%　10 年前 0%　15 年前 4%

このように尾口村在住の 20 才から 75 才まで 27 名（内男 8 女 19）から得たアンケート結果から，不充分ではあるが，住環境へ変化に対する住民の感じ方の一端が伺えたのであるが，生活環境としての自然をめぐって考察を試みると，

1）尾口村 8 地区 27 名からの回答は 30 才から 40 才代が大半をしめ男子より女子が多かったが，なかでも川の汚染への関心が高く，汚染と尾添川工事業者への開発工事に対する不満がみられた。同地区が土地的空間がせまいためからであろうか，庭地，畠地，日あたりの場所などへの住民の強い希望がみられた。また，自然との関連で，雪へのおそれ，地域伝承にみられる生死にかかわる事例などに特色がみうけられた。

2）自然知識および自然との接触は高令者程多いが，雪にかかわる衣服・用具などについての関心に特色がある。

3）サカナとりの経験をめぐって方法 10 例があげられた。ツリ，アミ，ヤス，タモが使用されたが，これは川の形態，自然環境とサカナの生息状態，とくに種類と生息数と強く関連しているものと考えられる。

自然環境と生物にかかわって人々の対応も変化しており，伝承もまた変容して行く，そして地方差が出現して行く過程において，地区住民の環境への働らきかけは，政治・経済・文化のしくみと深く

山にすむ動物	クマ・シカ・ウサギ・キツネ・テン・タヌキ・リス・モモンガー・カモシカ・タカ・ヤマドリ・ムササビ・イノシシ・ヤマネズミ・サル・イタチ・アナグマ・シクマ・ネズミ・イヌ
森に生えている植物	クリ・ブナ・ナラ・シヤクナゲ・ゼンマイ・ワラビ・ウド・コケ・マツ・ケヤキ・ハンサ・ヒノキ・トチ・ゾウキ・クヌギ・ジョウボ・イタギ・サルスベリ・ミズキ・シデ・ネリカワ・クルミ・キハダ・ナシ・ブドウ・アケビ・カキ・ヤマイモ・グミ・ウド・（ネギ）
畠にすむ動物(けもの,むし)	ネズミ・ヨタカ・ケムシ・ミミズ・ウサギ・キリウジ・モグラ・カブトムシ・カマキリ・コオロギ・トンボ・バッタ・チョウ・カタツムリ・ノネズミ・ムジナ・フクロウ・セミ・カラス・シクマ・ヘビ・トビ・トカゲ・カエル
川・池にすむ魚	イワナ・ゴリ・ニジマス・カワマス・メダカ・ムツメ・オタマジャクシ
周囲の生きもの	ツバメ・ハト・カラス・カ・ハエ・カメムシ・ゴキブリ・ヤマドリ・ウグイス・フクロ・スズメ・トンボ・キジ・ツグミ・メジロ・バッタ・キツツキ・ヤマドリ・トビ・ワシ・タカ・マメマワシ・カブトムシ・セキレイ・バッタ・セミ・ホオジロ・ヤマガラ・ヘビ・マムシ・ギアマツムギ・モズ・カマキリ・イナゴ・ビク

1974年　11月調査

図3　尾口村住民の自然知識例

むすびついているのであって，この点が，更に追求されねばならないと考える。

註3：将来私のすむところ
絵と作文による住環境要求度調査
真野哲三・水野昭憲
文部省科研究費　昭和49年度　宮地班報告書

Ⅵ　あとがき

同じ石川郡下の河内村　内尾地区と，尾口村　中宮・尾添地区を対象として両者間に残留するニホンザルをめぐる民間伝承の収録過程における地区にみられる特色と比較を試みたのであるが，残念ながら，伝承の収録例数もいまだその数も乏しく，充分な考察に至らぬのであるが，ニホンザルをめぐる伝承，そして民俗資料の収集がさらに継続され，その他の地区における資料調査が進められているので，今後，自然環境のなかで生じたヒトと動物・植物をめぐる人文科学的な考察は一段と興味ふかいものになろうとしている。本論では，尾口村の一部住民を対象としたアンケート調査の結果を報告したのであるが，引き続き，他地区においても調査を試みたいと考えているものである。自然保護センターのスタッフによる白山山麓地帯住民の過去から現在にいたる環境に対する働らきかけの綜合的な調査が望まれているのである。

文　　献

千葉徳爾（1969）：狩猟伝承研究　風間書房（東京）
———（1975）：狩猟伝承　法政大学出版局（東京）
林　勝治（1969）：白山ニホンザルの冬の生活，モンキーVol. 13 (5)No169　日本モンキーセンター附属博物館（愛知）
広瀬　鎮　（1973）：サルの民間伝承　美濃民俗No.74　美濃民俗文化の会（岐阜）
———・水野昭憲（1972）：民間伝承におけるニホンザル—尾添川にそって—　白山資源調査事業1972年度報告　石川県白山調査研究委員会（石川）
———・水野礼子（1973）：白山山麓のニホンザルをめぐる狩猟伝承と尾添川域の住民の動物観をめぐる考察　石川県白山自然保護センター研究報告　第1集　石川県（石川）
———（1974）：ニホンザルとの出合いにおける動物観との比較民俗学的考察　石川県白山自然保護センター研究報告第2集　石川県（石川）
石川県郷土資料館編（1972）：白山山麓地域民俗資料緊急調査報告　石川県郷土資料館　石川県（石川）
岩第泰三（1974）：ニホンザルの分布　にほんざる　にほんざる編集会議（東京）
伊沢紘生（1971）：白山蛇谷一円に生息する野生ニホンザルの生態学的調査　白山資源調査事業1971年度報告　石川県（石川）
金子有斐（1785）：白山詣　白山遊覧図　巻6（石川）
尾崎義雄（1973）：のとかが　四季の野生　北国新聞社（石川）

Summary

On the 29th of January 1975, author surveyed Oguchi-mura District and Kawachi-Mura District in Ishikawa Prefecture. Meeting with several informants, author collected the informations of Japanese monkey-lore in Utsuo-Mura.

Reporting all informations for Japanese monkey-lores, gathered at Utsuo this time, analyzed the meanings of lores and stand points of people's mind for Nature and Animal.

Japanese monkey-lore has its own background of the regional nature environments and social changes. In this paper, author reports about four points as follows;

1. Special feelings to Japanese monkey in Utsuo
2. Attitudes and way of keeping off wild monkey in the field
3. Capturings and eating of Japanese monkey
4. Traditional weather informations connected with monkey-lore

Nature recognitions and animal-lores are now becoming clear by the inspection of enquete in November 1974 in Oguchi-Mura. Feelings of people for the monkey are quite related to residents' lives in their own environmental changes.

It was remarkable that suceessions of the Japanese monkey-lore will be altered by the informants' valuation for nature and animal.